

FUN! たのしもう!

TOKONAME

Craft & Food

TOKONAME CRAFT FESTA



# TOKONAME CRAFT FESTA

2015.5.2 sat 10:00-17:00 — 3 sun 10:00-16:00

とこなめ陶の森・INAXライブミュージアムを会場に、常滑の街で開催!会場を回遊しながら、常滑を、ものづくりをたのしもう!

Have FUN! with CRAFT & FOOD MARKET

Have FUN! with 陶の森 CAFE LUNCH PLATE 1日90食限定!

全国からクラフマンが約80店舗出店します。陶・革・ガラス・布・木工など、“手しごと・手づくり”にこだわった、世界でひとつだけのユニークな作品がずらりと並びます。ワークショップも多数開催。知多半島の美味しい食も盛りだくさん!

「食と器とものづくり」をテーマにした、クラフェス2日間限定の特別カフェ。常滑の作家の器で、常滑・知多半島の土地に根ざした料理を、自然溢れる陶の森でお楽しみいただけます。作品の展示販売もあって、気に入った器はその場で購入も可能。お気に入りの一枚に出会えるはず。【参加作家】阿曾藍人 / 魚谷あきこ / 内村たかひろ / 大澤哲哉 / 掛江祐造 / 栢野紀文 / 鯉江明 / 富本タケル / 畑中圭介 / 濱比嘉詩子 / 白年守 / 平野政志 / 八木信樹 他



『とこなめ笑福猫市』同時開催◎常滑焼ヤマタネ 陶器だけでなく、とこニヤンステッカーなど様々な常滑の「招き猫グッズ」がたくさん! 10軒以上の招き猫グッズ作者が楽しい製作風景の実演&販売も! 【TOKONAME笑福猫舎】  
 とこなめ陶の森 常滑市瀬木町4丁目203 | INAXライブミュージアム 常滑市奥栄町1丁目130 | 名鉄線「常滑駅」または中部国際空港より、知多バス「知多半田駅」行き「INAXライブミュージアム前」または「奥栄町」下車  
 主催：常滑クラフトフェスタ実行委員会(常滑市商工観光課・とこなめ陶の森・常滑市観光協会 他) 後援：常滑商工会議所  
 【お問い合わせ】常滑クラフトフェスタ実行委員会事務局 TEL 090-6562-4906 enomoto@coupgut.co.jp イベントの詳細はホームページで! tokoname-craftfesta.wix.com/2015

土土少年のトコナメ日記

絵：榎中圭介 KEISUKE LUCKY HATANAKA | 常滑でartを暮らしながら毎日を書き進める。カラフルなものからシンプルなもの、その他様々な作品を作り出す。 http://keisukeluckyhatanaka.weebly.com

編集後記  
 「窯煙り たなびくれば 遠き世の陶のたくみの 血を受けし 若人われら いざ立たん 技をみがきて 新しき世界の前に・・・」私の母校、市立常滑中学校校歌の二番の歌詞です。窯煙りたなびく光景は常滑窯業発展の代名詞ではないでしょうか。私の家も大正時代から土管製造をはじめ四代にわたり常滑焼に携わってまいりました。当時の煙突は敷地内に現存しています。今回の常滑クラフトフェスタの会場は私が生まれ育った「奥栄」瀬木が舞台です。街のいたるところに「やきもの」が残っています。先人たちの残してくれた産業遺産です。こんな常滑を肌で感じて下さい。今回の創刊号には、常滑市長片岡憲彦様はじめ常滑を愛する関係の皆様にも多大なるご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。これからも「常滑のファンづくり」に皆様方の温かいご声援を宜しくお願い致します。  
 【TOKONAME CRAFT FESTAリーダー 伊奈義隆】

GO TOKONAME  
 常滑へのアクセス

- 電車  
 名古屋駅から約35分(特急) 料金660円(大人)  
 名古屋鉄道「名鉄名古屋駅」→(常滑線)→名古屋鉄道「常滑駅」
- バス  
 知多半島道路「大高IC」または「大府西IC」→半田中央JCT→セントレアライン「常滑IC」または「りんくうIC」

TOKONAME This and That VOL.1 APRIL 2015  
 2015年4月1日発行  
 発行 常滑クラフトフェスタ実行委員会  
 企画・制作 常滑クラフトフェスタ実行委員会  
 アートディレクション&デザイン 森月月(株式会社クーグート)  
 取材・文 伊藤 幸子  
 写真 今井 正由己  
 お問い合わせ 常滑クラフトフェスタ実行委員会事務局  
 〒460-0011 名古屋市中区大須3-42-30株式会社クーグート内  
 担当：榎本 紀久 TEL 090-6562-4906 MAIL enomoto@coupgut.co.jp

TOKONAME CRAFT FESTAは、「常滑のファンづくり」をコンセプトに、常滑の街の魅力を発信していきます。

# TOKONAME

## This and That

APRIL 2015 1 TAKE FREE



とこなめ、あれこれ。創刊号

LOCATION;  
 TOKONAME TO-NO-MORI  
 and around it  
 EVENT;  
 TOKONAME CRAFT FESTA  
 JOURNAL;  
 My Favorite TOKONAME  
 ART in the Street  
 TIMETRIP

常滑は歩くのが楽しい。







歩けば見つける、街の魅力。

焼酎瓶が積み重なった、堂々たる壁。大地にふんばって、家々を支える土管。常滑ほど、街とものづくりが一体化している地域はない。ここでつくられたやきものがこの景色を、街をつくっている。

背景にある物語を知れば、いっそう楽しい、街歩き。

懐かしくて新しい、常滑へようこそ。

風を切って走る自転車の爽快感や、雨風や荷物を気にせず移動できる車の快適さもいいけれど、街そのものを楽しむなら、なんてたって歩くのがいちばん。気になる路地や店を見つければ、すぐさま足を向けられるし、季節や風土をまるっと五感で味わうこともできる。そもそも歩くスピードでないと見えてこない景色や、車の入れない細道にこそ、その土地ならではの魅力があるというもの。逆に言えば路地や坂道の多い街ほど街歩きにはふさわしい。つまりは、そう、常滑は歩くのにぴったりなのだ。

やきもの散歩道を歩いて土管坂で写真を撮って、ちょっと買い物してお茶をして。週末のおでかけにもってこいの定番散策コース。でも、それだけで終わっちゃもったいない。ときには少し足をのびして、もっとディープで豊かな常滑を体験したい。

常滑クラフトフェスタ2015の会場のひとつ「とこなめ陶の森」は、散策の穴場的スポットでもある。小高い丘の上にある鎮守の森に、資料館と陶芸研究所、研修工房のほか、気軽に自然を楽しめる森の小径があって、意外と見どころがいっぱいだ。

駐車場から資料館へ向かうと、まず目に入るのは建物の周りに無防備に並んだ大きな甕や土管。形の歪みなどさして気にせず、大きさや形もそれぞれ違う、その大らかなたたずまいは、あたりの緑や民家とも相まって何とものどか。窯の中を模したというエントランスホールを抜け展示室に入ると、やはり甕や壺がずらずらと並び。陳列ケースの中には

なくそのまま置かれているのだが、ふと添えられた説明を読むと、平安時代末期から江戸時代。……って、千年前のやきもの!

こんな裸で置いて大丈夫なんですか?と思わずさぼすと、「平安、室町のものはさすがに少ないですけど、江戸時代のはたくさんあり、手に触れていただけるように置いています。このような甕がたくさんあった証拠に、先輩方が小さい頃には畑の脇によく埋まっていた、わんぱく坊主が遠足行く前に浮かれてはまっていたなんて話を聞きますよ」と、資料館の小栗康寛さんは笑う。肥溜めに落ちたという話は他でも聞くが、それが江戸の甕とは、さすが常滑。

モノが語るストーリー

常滑で窯の煙が上がるのは平安末期。茶碗など日用雑器に始まり、鎌倉・室町の時代には壺・甕など大型のものがつくられるようになり、東北は奥州平泉や九州の

大宰府まで広く流通したという。半島から海を渡り全国へ。これだけ大きなものをわざわざ運ぶのだからよほどのこと。貯水のほか酒造りや藍染めなどにも使われ、壺や甕が財産のようなものだったとか。壺や甕はろくろではなく、「よりこづくり」という技法でつくられる。一般的には紐づくりと呼ばれる紐状の粘土を積み上げて成形する技法に近いが、映像を見ると、出てきたのは直径10cmはあろうかという太い筒状の土。もはや紐ではない。それをつくり手がぐるりと体を回しながら積み上げる。できあがるものが大きければ、つくり方もダイナミックだ。このよりこづくりを、実際に生業としてやっている人は今ではほとんどおらず、市の無形文化財保持者としては一人だけ。しかし、昔取った杵柄、甕ぐらい今でもつくれるぞというじいちゃんはいっぱ

いいるらしい。体で覚えた技の頼もしいこと。常滑の職人の、日に焼けた自信たっぷりの笑顔が浮かんだ。展示品の中で、大きな刷毛か何かでぐわっと釉薬をまわし付けたような甕に目が留まった。産業用につくられた土管や甕などには、基本的に模様も何もないので、めずらしいですねと眺めていると、「何か人と違うことをやってみたいと思っただけじゃないですか?」とニヤリと笑う小栗さん。なるほど、職人も人の子、そんな競争心や遊び心が、ものづくりの現場にはあったのだろう。モノの向こうには、時代時代、この土地で生きていた誰かの姿がある。千年とてやっている人は今ではほとんどおらず、市の無形文化財保持者としては一人だけ。しかし、昔取った杵柄、甕ぐらい今でもつくれるぞというじいちゃんはいっぱ

常滑歩けば、やきものにあたる

とこなめ陶の森から、クラフェスのもうひとつの会場、INAXライブミュージアムへは、歩いて10分ほど。せっかく歩くのだから、その道中もたのしみだ。

少し歩けば、タイル貼りの門柱や陶製の穴あきブロック塀が見えてくる。長い壁一面に施された、その惜しげもない使われ方は産地の余裕のなせる技か。ブロックの穴からちょこんと顔を出す植物の葉がかわいい。電線などを地中に埋設する際に使う電線管の塀は、一見すると普通だに角に顔を出した多孔面が、本来の用途とは違う場所にいることを教えてくれる。

他にも、下を見れば家を支える土管が地面から顔を出し、体を張って建物を支えている。上を見れば屋根の上で

鍾道様の陶像が睨みをきかす。なんでも魔除けの効果があるのだとか。あっちにもこっちにも様々なやきものがある、その量とバリエーションの豊かさに、改めてやきもの産地であることを実感する。

それにしても、やきものは植物や錆びたタンなど不思議なほどよく似合う。同じタイルやブロックでも一つひとつ微妙に色や形が違い、手仕事や炎がつくる表情があるからだろうか。都市の薄っぺらな新建材がつくるのっぺりした顔とは違う、本物の素材が時間をかけてつくる生き生きとした存在感がある。素朴で力強い、民衆的な景色だ。

めくるめく、ディープな散歩道

ちょっと寄り道をして、常滑をこよなく



近現代の常滑の暮らしとやきものについての展示。「半農半窯」の日常生活や戦争の影響などがみられる。



資料館の周りに点在する大きな甕たち。芸術作品とは違う距離の近さは民具だからこそ。



木漏れ日が心地よい陶の森小径。



民家の前にあった千支の陶像シリーズのひとつ。



地元の人が「いちばん男前」と推す、どっしりと恰幅のいい鍾道様の陶像。



陶芸研究所の一角には、伊奈製陶の創業者・故伊奈長三郎氏の陶像や、大阪万博で地元の若手作家が制作した「月の椅子」などがある。



陶芸研究所の外壁タイルの淡い色調に設計者の控えめな主張がみえる。



つくった人の手の跡が見えるようなやきもの。



研究所の裏手にある研修工房では作陶家の育成もして、奥にある薪窯では研究生が三昼夜焼き続けてやきものをつくる。本物の火による体験は、単なる技術的な学び以上に、精神面を刺激してくれそう。ここで学んだ人たちが、常滑の今、未来をつくっていくのだろうか。



手前は土管、奥はやきものを焼成するときに使う窯道具のひとつ「エゴロ」が積み上がった路地。



地元のおばちゃんの農作業の傍らにもやっばりやきもの。常滑の日常の景色にすっきり溶け込んでいる。



# “TOKONAME This and That” JOURNAL

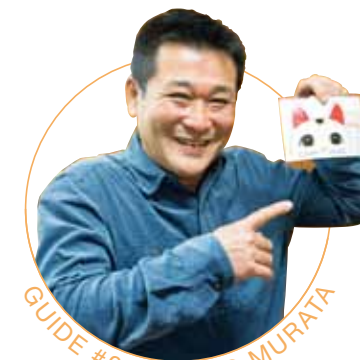
地元の人が語る、常滑の魅力あれこれ。

My Favorite TOKONAME

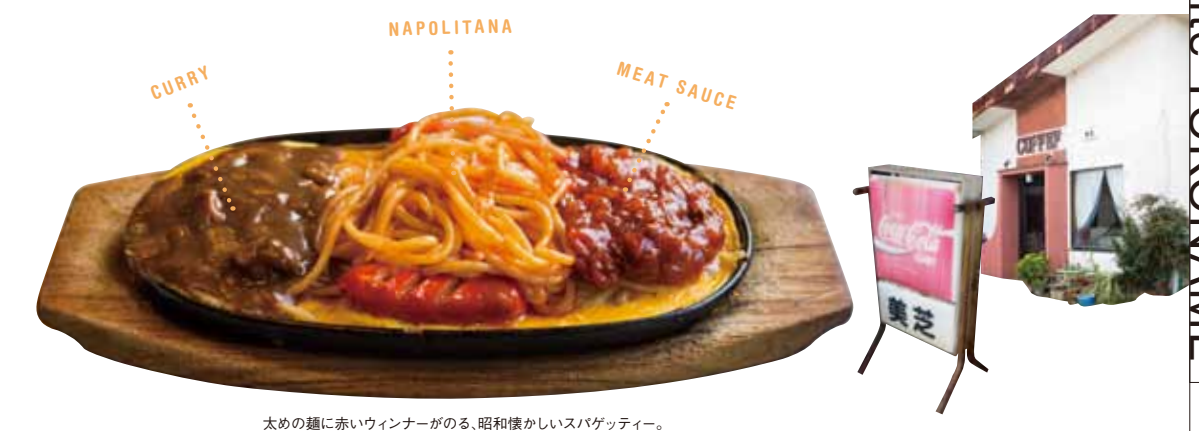
## My Favorite TOKONAME

#01

常連だけの裏メニュー!? 3色スパゲッティ



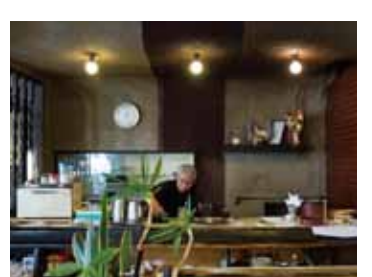
GUIDE #01\_KAZUO MURATA



太めの麺に赤いウィンナーがのる。昭和懐かしいスパゲッティ。

これは食べとかないかだろう、と2年ほど前に村田さんが地元の先輩から勧められたのが、この3色スパ。先輩によると20年ほど前にできた裏メニューで、おそらく常連客の誰かの要望で生まれたんじゃないか、とのこと。「地元自分も裏メニューなんて知らなかったし、久しぶりに来たらいつの間にかメニューに載ってて、よけえ驚いたわ。裏メニューのくせに先輩は週2で食べとったとか、しかも先輩の初デートがこの喫茶店だったとか、ありえんわ〜」とは、村田さんの感想。

初デートはさておき、裏メニューにもかかわらず注文され続けてきたという不思議なメニューの存在は、客との付き合いの長さの証でもある。そもそも客のほとんどが常連で、基本的にはメニューを見ずに注文するので、先輩がいつもスパゲティと一緒に注文するという「ごはん(100円)」も改めてメニューを確認したところ載っていない。ほかにカツカレーやオムライスも裏メニューから本メニューになったとか。マニュアル対応とは真逆にある、顔なじみへの柔らかな対応は、鉄板スパというメニュー以上に、いまや貴重なものなのかも。



美芝|地元の人に愛され、もうすぐ開業から半世紀。店主夫妻も歳を重ね、ぼちぼち店じまいも考えるが、営業時間の短縮を提案しても夜だけ来てくれる人がみえるから...と採算度外視の営業スタイルをさらりと貫く。この人情味、これも常滑の喫茶店。\*お店の希望で連絡先を掲載できないのも、常連客を大事にしたいという気持ちの表れ、どうぞご容赦を。

2015年8月29日、閉じられながら閉店されました。

LOCATION: TOKONAME TO-NO-MORI and around it EVENT: TOKONAME CRAFT FESTIVAL

愛する地元の人に「散歩道Dコース」なるものを案内してもらった。彼が遠方からのお客さんを案内する私的散歩道で、「D」は「Deep」の「D」なのだとか。地名でいうと山方町にある丘陵地の細道をぐるりとまわるコースだ。

坂道の先、見晴らしのいい高台にある住居跡は、青空を背景に、色も模様もさまざまな色鮮やかなタイルがあちこちに残っていて、案内してくれた人は「タイルのワンダーランド」と名付けていた。寂れた感じのない楽園的な廃墟で、同行者は思わず「ラビュタみたい!」と声を弾ませていた。

同じく案内の人が「常滑の天守閣」と呼ぶ場所は、焼酎瓶がまるで城の石垣のように高く堂々と積み重ねられ、これまた圧巻。殿堂さま気分、あっぱれと言いたくなる。

焼酎瓶の壁を見ながら、「あ、あの口のところネジがきつてあるのは硫酸瓶」という説明を聞いて、陶の森の資料館で聞いた話を思い出した。「焼酎瓶の中に硫酸瓶が一つだけ混ざっているようなところもあって、そこにつくった人の遊び心が見えるんですよ」。この誰とも知らないが、その分かる人しか分からない洒落っ気に、小さくエールを送りたい。

さて。ディープなコースはまだまだ続く。路地を進めば、つじつま合わせのように大小の土管が無造作に積まれた土留壁や、平べったいタイル板を何枚も何枚も横積みした塀など、常滑の特産品が次々にドドンと現れる。大らか、大雑把なこの景色は、地元の人がそこらへんにあるもので、てらいなくつくった証だ。ああ、観光をまったく意識していない、何でもない路地の景色が、こんなにも表

情豊かだなんて。感嘆する私たちを見て「直島なんて行かなくていいでしょ?」と案内人は誇らしげな顔。確かに、島中にアート作品が展示されている人気スポット・直島もいけれど、常滑は素のままで見ごたえのある景色がいっぱい。

このDコースだけでなく、常滑の街には魅力的な景色やエピソードがいっぱい散りばめられている。やきものは黙して語らなければ、少々探究心と想像力が必要だけれど、昭和レトロがそのまま残る常滑でなら、子ども時代を思い出しながらの向くままに探検するのもいいだろう。やきものは濡れると色が濃く鮮やかに見えるらしいし、私も次は小雨の降る日にでも来てまた散歩したい。だって、常滑の街は何度来ても楽しいのだ。

**とこなめ陶の森**

資料館、陶芸研究所、研修工房の3施設があり、やきもの文化に親しみ、隣接する常石神社の鎮守の森にある「とこなめ陶の森小径」では四季折々の自然の中で散歩を楽しむこともできる。愛知県常滑市瀬木町4-203 TEL 0569-34-5290 開館時間/9:00~17:00 休館日/月曜日(祝日の場合翌日休)、年末年始 入場無料 http://www.tokoname-tounomori.jp

**資料館**

常滑焼や常滑の人々とやきものとの関わりを学ぶことができる。生産用具や窯跡から出土した壺など約300点が展示されている。

**陶芸研究所**

現代陶芸の名品や古常滑の大壺などを、テーマを変えて展示している。濃い藍色のタイルのグラデーションと軒の水平線が印象的な建物は、著名な建築家・堀口捨己氏の設計で、細部にこだわった造形も見もの。

LOCATION INFORMATION



焼酎瓶でできた「常滑の天守閣」。



焼酎瓶、タイル、レンガなど、さまざまなやきものオブレード。



日当たりがよく明るい廃墟「タイルのワンダーランド」。住まいの中にもやっぱりやきものがある。常滑の暮らし。



第二次世界大戦時にロケット戦闘機・秋水の燃料製造のためにつくられた陶製容器。モノには時代時代の様相が映しだされている。

⑤

ART in the Street

## 街角これもART

#01

産廃が観光名所にー常滑民芸



平安末期からやきものをつくり続けている街常滑。日本六古窯のひとつで、樂聖堂・山楽碗に始まり現代の衛生陶器までその時代時代の暮らしや産業に必要な用いものを生産している。明治時代に始まった土管は、近代の常滑を代表するやきもので、ピーク時には300〜400本の煙突が立ち上がり、年間3千万本を超える生産があったという。そして、ものをつくれば不良品も出る。硬くて重い、言わば処分が困る「産業廃棄物」が、役割を変え土留めや塀となり、常滑独特の風景をつくっている。本来の役目を果たさないものが今や観光名所のひとつだ。私は、手が入っていない素朴な景色やデザインが好きだ。デザインとかアートティストの作品ではない、観光客や人の目を意識せずにつくられた土管坂のような陶の風景の美しさ。こんな景色を「民芸」と言えないであろうか。



**文: 磯村司**  
TSUKASA ISOMURA | 常滑生まれ常滑育ちで、小さい頃の遊びは粘土細工。20年間の衛生陶器の製造経験を経て、INAXライブミュージアムのスタッフとなり、「光るどろだんご」づくりをはじめワークショップを担当する。趣味は街の散策のほか、美術鑑めぐりに、ヨット、お酒など。

⑥

## 時間旅行



**DATE** 昭和30年代 前半  
**LOCATION** 瀬木の土取畑の工場(常滑東小学校の西)  
**MEMORIES** 家業であったノベルティの置物を焼いていた工場で撮った写真です。窯から煙突に続く煙道に落ちてしまい、ハチマキではなく包帯を巻いている私です。子供の頃は工場が遊び場であり、奥の家の母の実家近くで「呂号の大壺」に入って遊んだのも懐かしき思い出です。  
\*第二次世界大戦末期のロケット戦闘機の燃料製造のために製造された壺

**TRAVELER #01**  
常滑市長  
**片岡憲彦**  
NORIIHIKO KATAOKA  
NORIIHIKO KATAOKA | 昭和29年生まれの60才。昭和52年に常滑市役所に入職し、街づくりに貢献。平成19年12月常滑市長に就任し現在2期目。趣味は旅行と映画鑑賞。忙しくて時間が取れないことが悩み。



TIMETRIP